

## 令和3年度 第2回美術学科FD研修 報告

日時 2022年3月23日（水）10時30分～12時

担当 新井

出席者 権田、堀、新井、本山、大谷、和田、大場

評価基準の平準化と教える技術の3分類と題して新井が担当した。一年に一度、美術学科における成績評価基準について共通見解をもつ機会設けている。①学生のパフォーマンスに対する適正な成績評価②学びの質の保証③教員間の成績評価基準の平準化④成績状況に応じた適切な学修支援について、それぞれが振り返り共有した。

### （成績評価基準の平準化）

GPAの分布では、卒業制作などで2割以上の学生がSの授業があった。コース人数の影響もあるが、Sが多すぎるのであれば授業の到達目標をもう少し高く設定する必要がある。またA評価が多い授業は評価基準がやや曖昧で、努力点の見積もりが多いと思われる。卒業制作（ゲーム・油画日本画・染色陶芸）美術文化研究、デザイン論などがSとAをあわせて8割以上の学生が相当するため、評価基準の検討が必要である。

授業によって点数化しやすい科目、努力点が入りやすい科目があり、特に美術の実技は点数化することが難しい。課題や取り組みにおいて「できている項目」だけでなく「できていない項目」も示して到達していなければ『B』といった具体的に評価を示すようさらに検討していく。卒業制作の賞選抜においては、コース担当者の意見だけでなく、コースを超えて教員同士で成績評価し話し合うことで、概ね納得のいく評価ができるようになってきた。演習科目においてもデザイン・ビジネスコースでは、オーディションなどで努力点は加点しないと明確にしておき、評価分布はやや厳しめではあるが妥当なラインであった。そのかわり、授業中のコミュニケーションにおいて、各自の努力は十分に評価していると伝えており、このことについては大変参考になった。



### （教える技術の3分類）

3月に外部評価会議を受けたものと連動し、ディプロマポリシーをもとにした授業展開として『教えるスキルを3つに分類して考える』という内容でプレゼンテーションを行った。一年に前期と後期末で授業を振り返り、他と比較し検証することで学習成果としての評価の在り方を再認識し、それぞれの教育方法について共有する有意義な時間となった。

以下はプレゼンテーションの概要である。

【運動スキル】絵を描く、ピアノを弾くといった技能の上達には・段階的な学び・できていることとできていないことをフィードバックする・できない時は難しかったポイントを聞く・頼られなくなったらゴールといった点が重要である。

【認知スキル】文章を書く、プレゼンをするといった技能においては、・解き方パターンの習得・問題解決のパターンを多くもつ・それらを活用する場を設けることが重要である。美術学科のカリキュラムマップを検討すると文章力、論理的思考を専門の教員が担当する科目が欲しい、という意見があった。

【態度スキル】リーダーシップをとる・自己をコントロールする・モチベーションをあげる、といった態度スキルは、日常的なトレーニング・こちらの期待を相手と共有する・面談指導の方針などが重要である。